和漢文撰

詩類　歌類
辭類

二

へ5
2236
2

門へ利5
彌 Z.298
巻 2

宮内省圖書寮

和漢文撰巻之二

○詩類 附序

△大和真名詩序 並賛

東葦坊

頃日撰分獅子庵之文庫迚點検燈花詩藁取了則従歌行詞曲之題類雜五言七言之律詩而大槩有二百余首乎去者従延寶之中比及貞享之末迄十餘年之草稿也其詩也為学士太白之

内閣文庫

凡情冥杜子美之風姿止乎学之而思之則心知而不口慨扨有從音訓之違決而知難学物了矣於茲從元禄之始思立大和之詩而製假名與真名之二様了則假名之詩有從五七之句法殆爲似和歌了共語路之拍子有謂漢土之詩矣于然謂真名之詩有協音韻些調平仄些蜂腰鶴膝之捉迄一麼不背漢家之詩法交以音訓之通路視之時有漢字也共聽之時有和文也乘尤在

共有故翁之所謂事大和有從中昔之風俗有狂歌有狂詩而以如夫有千金是有疝氣秀句與口相之雑話爲名附詩共歌共乗尤有有一座之酒與而謂猿楽人之軽口矣文章有例有姿情之二而姿情有先後事有從本詩歌之骨法也則言語之面通味有可口傳了共姿情之枯回有不心知與所我分傳居其間之糸節而同以風雅不認於諸越別以比與不狂于大和實麼思被嗔我

朝之詩而特有雅俗通用之一格事歷
乍充有和漢語之音韻而爲用俚語之
續了則似通昔之狂詩而不遁戲法之
罪止所詮者爲蹈詩之六義些尋韻瑞
活法之古語而用二字之字之韻礎居
據說文韻會之正義而調五言七言之
和訓至者何迚可成叢醫者之狂詩成
表見師之狂歌矣耶爰見羅山之七字
城了則其言取漢語以詠我朝之事而
此可爲骨彼可爲飾與者一言万當之

凡例而謂爲盡大和真名之要矣学
彼人者可恐此人者不学彼了
增而謂大昔之風俗則此物風人乎麼
爲先教誡之情而爲後文章之姿了則
花鳥之優游亦者爲厥樣也其畫實情
之餘迚加陪助語副止手古之情者隨
天理居今之情者噴人理歷爾有則温
情之故而知姿之新了哉漸從本子唐之
詩人增而至趙宋之作者則詩亦者除
助韻之字而五七之間不費言葉見習

其身其侈之名人而巧一字一言之妙
歌含無量之情芸似童部之屆言傳而
有聞人麼推量之沙汰也乎實夫我朝
者手不沙国也則倣詩經之麟之皇矣
而可用乎哉乎也之詞皐矣歌行之類
者勿論之事也其内音韻與平仄之事
者不知所用之道理共暫不背古法耳
也則假令遇兩韻之字時者可勿論用
兩韻矣手從本見為得詩聖之名杜律
之五言七言了則平仄之不合麼有多

不者向不知者而論不知事則夜麼用
麼摸象之帶貫也乎熟思風雅之変則詩
者成騷騷者成辭而今者成詩歌與連
俳了則和漢有面々之物數奇而諫人
宛慰我宛從詞遣之虛實例知林數去
與面通去則詩者唯遊志之行處而不
知知言語之無用乎左者云些此詩之
易学而黄白之殆麼稽者多則世更成
往詩之思而不田于畑学文之人者成
巴人薤露之和共向風而歎之則不堪

于白雪之詠乎誠恐而可学誠学而可
思有唯是此詩之風姿也則風情有今
之不及言乎時元禄乙亥冬神無月
十二日誠製真名之詩而賛故公羽之屋
像有爾也

其賛

東花坊

此翁昔在武陵城　野分芭蕉似雨鳴
蘭省得時櫻繫馬　庵山捨世竹棲鶯
歌羞西上人塩渡　詩傚杜工部字情

和漢文章誰可敵　假名不必隔真名

○評云此詩八蕉廉ノ法ヲ以テ和漢兩用ノ作ヒ云ハン按スルニ一二ノ起句ハ祖翁嘗テ武江ニ遁テ芭蕉野分シテ蜑ニ雨ヲ聞夜哉ト其世ニ郷音メル殺句ニテ芭蕉庵ノ名モ此時ヨリトヤ然ハ前對ハ一世ノ栄辱ナトラ内氏文集ノ詩勢ヲ假リ後對ハ一生ノ風雅ニテ常ニ西行ノ山家集ト杜律ノ五言トヲ持アルキ結ハル信古ノ愛情ヲ顕セルナリ此故ニ七八ノ結語ハ假名ト真名トノ通用ヲ私ニテ遠ク祖翁ノ遺命ヲ傳ヘ近ク我師ノ懐ヲ遂ントリ

○賛雪中柳

此繚使人思古議　桜花未識竹先知

知ルト與ヘ不識ラン孰カ為カ愈サリ　柳ヲ氷凝ル彼ニ雪撫ス

○評云ル詩ハ畳語ノ格ニテ法ハ換骨ノ絶妙ト称セン去レハ
蓋山ヲ夜雪ノ句ヲ假リテ賞字ヲ讃字ニ換タルハ例ノ
勝句ヲ畳ム時ニ詰路ノ拍子ヲ調ヘ存シ增テ孰愈ト
ハ論語ニ知ル子ノ裁入シ為ハ梅行ノ知ル知ヨリ
柳ハ知ナカラ雪ニ推レ居ル人ニ利鈍ノ用ヲ知ルトニヤ詩ハ
誠ニ此等ノ訊諫ヨリ孔子モ常ニ勸玉ヘリ　此繪ハ濃ノ
野艇亭ニ在リテ祖翁ノ作繪ト同ク十襲ス柳雪堂
ノ標号モ此時ノ称ナリトフ

詠懸ル松蕣ヲ

何ソ不ン朝顔ノ知ラ我秋ヲ　松憑ニ千歳ヲ幾程ノ秋ヲ

凋ム時可ル恥ル祇王ヲ意ニ　莫恨ナ不知ザ白露ノ秋ヲ

○評云ル詩ハ之韻一協ニシテ詩意ハ註スルニ及ハス祇王神女
カ如ク跡ハ逝ル哉ノ祇王寺ニ在リ發心ノ歌ニ朝出ル
枯ルヽモ同ク野邊ノ草何ヲ秋ニ逢テ果ルキト詠ス
テ佛御前ヲモ恨ストフ為ニ此詩ノ之韻ハ其ハ歌ノ意
摘テ秋ノ字ヲ運ルナリ首句ト落句トニ不知ノ二字ハ
連俳ニ云ル同字異訓ニシテ此等ヲ和詩ノ凡例ト知ルヘシ
不知モ莫恨モ万葉ノ熟語ナリ

戲ル俳道ニ

四十八枚ノ頼　終ニ成ル紙子坊ト

與風情若繁　無物遣浅黄
肩竺有伊達　心曾無化粧
穴勢初雪且　立不恥梅香

○評云此詩ハ全ク大和ニシテ四十八願ノ仏語ヲ假テ紙ノ縁語ニ結ベルハ戯ノ一字ノ誤諧ト知ベシ按ズルニ此法師ハ歌舞ノ遊興ニ千金ヲ尽シテ若道心ト成レヒヤ若繁ノ二字ハ其所縁ト関ル此故ニ七八ノ結句ハ初雪ノ風姿ヨリ梅香ノ風情ヲ含ベル一篇ノ風雅ハ此二句ニ在リテ立而不恥者其由也興ト云ベル論語ノ詞ヲ裁入ベル談笑ノ虚実ハ更ニシテ文ニ摘採ノ絶妙ト称ス〻ベシ増テ梅香ハ紙子ノ臭ニ敵シテ一篇ノ起結ト知キヽリ誠ニ真名ノ詩鑑ト云ベシ

須臾ニ従ヒ二竹丈人ニ祝シテ七夕ノ之節供ヲ而被贈ル第紙一束ヲ多ク謝ノ毎歳之恩而弥寄四情ヲ而已

一　栗ノ荷恩何若軽　思君四百八十情
誰知ル小弟ノ戦ル於荻ニ　音信不誤文月名

○評云此詩ハ大和風躰ナカラ論セハ連歌ノ優情ト云ハン十帖ノ絆ヲ故々ニ分ケテ四百八十ノ恩情ヲ荷フトハ誠ニ微意ヲ尽セリト云ベシ然ニ十ノ字ヲ時澤坊ニシテハ春風ニ而九十橋トモ南朝四百八十寺トモ其類ヲ長安ノ語音トカ註スト我朝ノ人ハ語音ニ通セス何ノ道理トハ知ラヒ百法ニ任スルハ例ノ故実ナリ去ハ之四ノ結文ニハ全ク和歌ノ詞ヲ摘テ

定家卿ノ神無月ヨリ絆ニ文用ノ名ヲ寄セタル萩ノ音信モ
和歌ノ句鑑ニテ此等ニ和漢ノ通用ヲ称スレ但シ小菊ハ小枝
類ニテ表濃ニ封紙ノ名産ナリ二竹ハ戸田家ノ武士ニメ濃ノ
者崎ニ嘉遁セリ先師ニ腰滝ノ四友トフ称スルニテ小菊
○ノ詩ト俄道心トノ詩躰ハ大和ニ連俳ノ二様ヲ尽シテ此等
○ヲ真名ノ詩鑑トハ云ハンカ祖公羽ノ恐レ玉ル狂詩狂歌
ノ雅ヲ通レテ変ニ雅俗ノ當用ヲ知キナリ

右此五首、者え禄ノ之新製而
燈花詩叢之附録也尤有厚
再撰文撰而為大和真名之
濫觴後人宜敷可勘察也

真名詩類　雑題

和栗山氏詩　林道春

有雄之又有雄之　此氣浩然左匡言
雖古神代春来者　東風吹寄自天原

○評云此詩八四雄山文集ニ在テ殊ニ我神ノ始ヲ云レハ義ニ
真名ノ詩ノ首ニ倫トセリ然ニ詩ト歌ハ語路ノ拍子
ニ卿ノ遠アリテ俳語ノ用ヒ漢詩ト成リ漢語ノ用ヒト
俳詩ト成レハ此等ニ後君ノ評ヲ待ヲ詮ス所ハ狂詩ト
俳詩トニ一歩千里ノ好雪ヲ知レトナリ掬スル言語拍子
ハ本ヨリ俳諧ノ自用ニテ和歌ニ五七ノ歩去ヲ知ナリ俳諧

二四六ノ文法ヲ立ル八例ニ一類ノ意地ト知レ難シ詩ト云リ
又ト云イ五七ト四六トノ拍子ヲ知ラン人和歌ノ優情モ俳諧ノ平話
モ雅俗ハ言々ニ知レキヽリ

賛秋風儀　蓮二房

世傳ノ此老翁　越路恨秋ノ風ヲ
今見何雖面　松残ス夕日紅ヲ

○評云此繪ハ松ノ木陰ニ老僧ノ杖ヲ携テ雲ニ又ハ残照
ヲ詠ス躰ヨリ芭蕉翁ノ越路ノ行脚ニ赤々ト
日ハ雖面モ秋風ト詠セシ旅行ノ愁情ヲ引替テ今見
レハ景色ノ面白ヲト轉シテ賛ルモ作者ノ活法ヨリ此等ニ
意地ヲ知キシ其繪ハ越中ノ倚虎亭ニ在テ知ニ有家珍ト

戯ル影法師ニ　北陳人

木端影法師　盞取夜寒ノ安ヲ
絶宿ニ既整富　無当非ス玉巵ニ

○評云此詩ハ例ノ諧謔ナカラ徒然ノ意ヲ摘テ今ノ法師ノ
無風雅ヲ訊諫セシニ身ヲ木端ニ捨果テ月花ノ世ヲ霄霞
セハ玉巵モ當ナキ心地ヲト全備ニ月ヲ含ル隠見ノ法
ヲ見キヽリ結句ハ木端ノ繋ニテ玉巵無當雖宝ト非用ニ
ト云フ文選ノ詞ヲ採ル非字ノ影畧ヲ互見スレ共ト
當字ニ平仄ノ論ハ例ノ兩韻ニ任スキヽリ作者ハ尾陽ノ
素水ニシテ水陳人ハ標号ナリトフ

謝祢茄子作有八慧て庵記　土方豊二名録アリ

含露鬚蕉鮮　更思繁所縁
我郷何為酒　月瘦不蟬蜎

賛鳥羽繪之蒲萄　渡白狂

峯吸蒲萄何国僧　足如竈馬口如蛙
盗時有好威童部　夕遇栽園可振痍

此圖八洛ノ金暇筆ナリト詩ハ諛諧ニシテ註ニ及ハス其繪ハ濃ノ六之亭ニ在リ但栽園三百第ヲ移テ高卧郎ハ自称ナリ

△假名用ニ真名ノ韻序　並詩　廉安道

我聞諸越之人有作詩了共不能世国之歌大和之人有誦歌了共不能彼邦之詩假令詞有音訓之違麼情者何連隔和漢矣聞則高麗人麼馴大和歌而誦我唐国之妻所憑敷琉球人麼遊筑紫而詠紅葉赤間関之夕皆梟笑皆只為風雅之通情厚哉扨社所聞彼邦之詩經者通我朝之万葉集居唐詩之

凡有為似古今集與哉詩者本通和漢之志了則也今者六歳之先也要儂東有桃花老仙而奈何捨我国之易讀假名而学他邦之難知真名耶迎新製平假名之詩而令畫溪家之詩法者誠謂本朝之文鑑者矣於茲不恥我拙頃日送蓮老師之帰義濃迎為假名之詩用真名之韻止乎老師称其詩曰先師昔有奈猫文而斯所所交和漢之韻今也以此詩之格可謂万葉之韻與所誠哉

如放之文之箭而獲八百之鳧率夫不謂徼倖乎耶仍以霜云

霜

おもふ秋の月をこそ
かなしけれ
おもふ秋の月をこそ
かなしけれ
墻

友

なほ時毎のこころ中
くるる
来

享保甲辰の歳且つ例の詩とあつ
を屈て万葉の韻と
一冊の接和
ことに

国君と祝して

廉安道

著

志ふかくそなたの
我をしたふらん
足

茨

そなたの国の
そなたの国の
狐

おもしろく万葉斟酌とりて
しらべそ反歌の字とろむ　毛物子

天ぢ[illegible]ゝ[illegible]やゝ[illegible]かゝ買　我はのりとは非そ[illegible]解
[illegible]蘭　[illegible]の[illegible]蟹

○評云右此三首八万葉韻ノ濫觴ニシテ或八音ヲ用イ
或八訓ヲ用ユ其八其書ニ跋渉シテ多八古例據ル
字ノ人八例ノ狂簡ヲ恐キ作有八賀ノ金城ニ住シテ
康熊ヲ姓トシ安道ヲ名トス本ヨリ詩騷ノ逸人ナリ
トウモ物子八橋姓ニシテ俳名ヲ侶鵲ト云フ金城ニ数奇
ノ名ヲ称シテ縮行官家ノ人々モ友トシ学ヒストヲ埴
嘗テ先師ト虚実ヲ論シテ書通ノ遊敵ナリトウ
享保甲辰のとしのあんかの百葉の詩とひらき猶
[illegible]二字韻の熟語あつて抑子庵ノ例の遊戯

とたやゝ下句面のおもしろきを思題と
ちくりてはそて二字韻のをとと製て

田家憲　蓮二房

ちとせ[illegible]の名ぶ[illegible]ぶ[illegible]　露濃　花[illegible]のよりやよ[illegible]　俗中
[illegible]書[illegible]ぬ沼の[illegible]　影副　[illegible]の[illegible]　慙通

○評云此体モ万葉ノ韻ニ似タレト多八訓ニシテ音八稀
ナラン然ニ此格ノ要ル所八和漢三字ノ熟語ヲ尋テ
私ノ韻礎ヲ作ルカラス狂トハ此堺ヲ掛ル露濃
ト八雅俗通用ノ平話ニテ[illegible]例ノ通語ヲ俗中
ノ二字八日本紀ニ出テ影副ハ万葉ニ在リ慙通八真名

伊勢物語ニ成ハシヲ成シトハ例ノ略語ナリ然レハ浅香ノ花
カツミト詠シ影副所見ル山ノ井乃ト誦メル總テハ古歌ノ
裁入ニテ此等ヲ二字韻ノ鏡ニ見ルヘシ去レト陶思氏
紛乱氏俗習ニ用ヰ来レル故実ノ詞ハ論ニ及ハス但ハ
自己ノ作ト云フ氏或ハ古文ノ例ニ效ヰ或ハ文字ノ実ニ據リ
或ハ字訓ノ郷音ヲ假ラハ却テ奇絶ノ作モ有ヘキナリ
其等ノ設ハ大和詞ニ見ルヘシ

こよしみ月のけしき貴き蓮佛より眞ヘ名此
二字韻もあれはこそ春の一華とおもひ起こしつ
おりおりしまをあそこし無ある時もし春の四季をとまろそ

然ルニ七夕ヲ意

庸安道

こよひ待つ乃めくく　あさ涼　何ゝのことを世にかくこてく　虚言
人の待ちの事かは逢ひちまそ　茅葉　いくよ年をちきりおこそ　係樽

○評ニ云此詩ハ恨ル意ナカラ逢テ不レ逢ハ意トヤ云ハン誠ニ恋情
ノ的白ナル此等ヲ俳諧ノ微中ト賛シテ和歌モ及サル
所ト称スヘシ按スルニ浅猿トハ例ノ假訓ニ意ヲ運ヒテ
此類ヲ大和ノ古文ト云ヘ虚言ハ常語ヲ論ニ及ハス然己
ニ茅葉ト係樽トハ全ク作者ノ働ニシテ茅葉大根葉
ハ例ノ俗習ナリ況ヤ係樽ノ古語ヲ假テ物ヲ係ノ金ニ
據レル字訓ノ郷音モ文字ノ実モ此等ヲ自作ノ絶妙ト称スヘシ

「右今をて三首を文操よ新制よの二句ひ色前の三首
と下華ノ韻とつひ後の二首を二字韻とてよ畢竟ハ
求韻の要をして作も不作もも同まちうへこもし

老圃詞

岸昨宴

我とかゝと人のゝろうゝ　可南　露ゝ志ゝれゝ笠のあゝけゝれ　旭曉

勝ゝゝくゝ也ゝゝ　来品　おゝゝゝれゝ世ゝ留ゝゝ　而云

祝竹餅

桐左角

所業を思ふとよみて　廉　蓬を子の餅ゝゝれ　鹽

名し覚めいるゝゝゝ　側　けふむゝゝゝゝ　兼

○評云此詩モ万葉躰ナカラ称スル前ハ二四ノ面通味ナラン哉ニ

草餅ノ撮タルヲ掌ノ振ニ喩ヘ芋頭ノ蹲タルヲ鞠形喩

ヘハ俳諧ノ形容ナリ況ヤ花ヨリ團子ト人間ノ俚語ナ

ナリ然ルヲオニ韵ノ鹽字ニ假名遣ノ論アル（イカヽ）ヒ庵ト云イ

頼ト云イ（ハヲ）撥ル字ハ總テ ポノ字ヲ用タリト 故ニ文ニ道理ナキ

故ニ我朝ノ字書ヲ見ハヒヘポヒヘヒヲヒ假名附アリ然レ假名

遣ト云フ文ハ定家卿ヨリ後ノ沙汰ナリトヤ道理ノ知レ

文多シ然ハ両韵ノ序説ノ如ク其ハ字ニ其理ノ明ナラ文

ハ時宜ニ隨テ用ヒキヤ例ノ勘案スベシ作者ハ三方楼ノ記ニ名アリ

喜七夕晴

池二川

空青へ雲ハ風もなかれと　たゝらさへ（ハギ）梭の色ゝちら

せるかちきりいとも　歳（ハヒ）年のあふせのあ（ハヒ）ひ也ゝゝ

まつらんを　すゑとやいはん　ちゝの詞のつもるなるかゝ
我しれらひの衣かゝさき　ねをとゝれぬけさしれ

○評云此詩モ律法ノ新制ニシテ例ノ大和ノ一格トヤ云ン
一三八菖ト櫨トヲ以テ渓三前對ノ法ナカラ中間ノ二對ニハ
文字ヲ對セス黄菖和渓ノ四字ヲ以テ此等ヲ意對
ノ絶妙ト称スヘシ但ヤ假名ニ真名ヲ附ハ催馬樂
ノ古制衣すり作者ハ越中ノ富山ニ住ス池田氏ノ家士ニシ
先師ト北蘭ノ友ナリトフ

假名詩類　雜題

巌好法師贊　　素花仙

現ゝ　ゆゝ　静　ゆゝ　なる　　和　ゆ　き　は　ら　ん　ま
あ　ま　の　ま　も　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
富　の　一　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
本　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま

柳後園屏風　詩歌時代各ヲ　　隼人

柳の面ハ　ゆ　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
ものゝ　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま

隼人落ノ吾仲之

愛ス牡丹ヲ　作者ハ枚王頭ニ各録アリ　　伊東恕

牡丹ノ蝶ハ花ノ精ニ成リテ来ルトイヘリ
我ヲ思ふ心のひとつ花ぞ
ちるを待てまたれぬ春ぞ

詠梅

高尤把

梅ぬし　えひらけ　みんなみえて
雪ぬき　ほころ　まちきたる
園を　あやかと　きれらつくむ
窓に　香とかる　あらはるめれ

此詩八唐ノ李太白カ五七言ニ效ナリ和ト漢トニ音訓ノ差別ヨリ句ノ配リノ違ヒヲ見ヘシ作者ハ高田氏ミシテ尾城下ノ逸人ナリ

擬古

作者公文臺序ニ姓氏アリ

張舞角

松と竹とは大路をはさみ　如ちりあるれを所月とや
花を非代のうつろひとて　餅のうきくちりぬるとて

筆

此詩八万葉ノ假名ヲ假ワテ都金ト時雨トノ二字ニ對ス大和ニ對類ノ格ト云ヘシ

岸時裏

ちるとうるのうつりかはりて　みうとと作ある世いとそ
ロくいろの花ぬ歩をかよりて　里のかくるそのとはうよ
ちぐき冬と春のやをもの　付雨と庵のかくをめれ
そそもや嬬子の性をはをあく　いくく遊女の憂とはくらん

懶ニ小傾城ヲ 作者八文鑑ニ姓氏アリテ黄山下ノ隠士ナリ 渡右範

ふるとなくもののあはれとまつひて　さとりし北斗の星も移りぬれ
あはれとあひの鳥とあくれば　法めしと鐘あらはる夜

対花感老 作者越ノ安居寺ヲ辞シテ其幕ニ招道ス南居ヲ柳明春ト云リ 僧音吹

春ちかくなりぬれば　山も移りぬるとしの暮かな
いとしつくしかりしかの　ちりぬ芳郷のもとの花

民ノ詞 作者有八文鑑ニ名録アリ獅子門ノ親族ナリ 各東羽

此ノ如ノ詩ハ　さくはしらるるかはらに
あはれ秋の柄とるるこはに　我ふるまれぬ月さ

算 擬古詩ニ

渡白狂

宿のうき名は柄ノ節ぞ　竹と一おのこの妻ぞ
柄ぞ　竹ぞ　籠ぞ　いとしぬれ　竹ぞ　ちりぬ

○詩ニ云ル詩ハ一字ニ韵ノ格ナカラ梅ト竹トヲ四句ニ配リメルハ古詩ノ躰ト云キナリ本ヨリ一字ニ韵ハ漢家ニハ多ケレト和訓ニハ語路ノ分ケ難キヲ疑辞ト云ク嘆辞ト云ク口合ノ別ノムテニ段ノヤノ字ヲ用ヒメル例ニ大和ノ新制ト云ハン然ルハ一篇ノ註ニ所ハ算宿梅ノ古詞ヲ假テ算

ノ一字ヲ含ル格ハ隠見ノ絶句ト称スヘキナリ

師走朝霞　仙里紅

分て拾柿の餅にたゝ　長き頃此柿へ咲てよ
間よりゝ柿の枝し新れい　世とゝ川に潜るゝも

○評云此詩ハ黄鸝園ノ歳暮ノ賦ノ奥ノ躰ナカラ梅ニ
ハ暗部ノ古歌ヲ摘シ白川庵船ノ俚語ヲ採テ誠ニ俳諧ノ
滑利ト称セン作者ハ柳川ノ千折ニシテ摺本ハ歳ニ各録アリ

松葺停　松下牧

秋の時雨北にあるりゝ　嵯峨の山く物ゝ

たゝ　ひゝに傘此柿とゝ　けるゝ
ゝし仲国ゝ嗅ゝ　ゝて霊ゝ　ゝ
遊路の時し汐ゝ　色ゝ　ゝ

○評云此詩ハ全ク賦躰ナレトモ後對ハ例ノ寓言ニ似タレト
嵯峨ニハ仲国ト中将ヲ嗅出セル様ヲ示シ葺停ニハ
霊夕ト松風ヲ感シ乱舞ヲ含ム然レハ西行ノ歌ヲ
起句ト成シ樂天ト詩ヲ結句ト成セル和漢ノ妙ニ
シテ総テハ揉文ノ絶妙ト称スヘシ作者ハ尾城ノ武門ニシテ
近松ヲ氏トシ茂矩ヲ名トス其祖ハ義濃ノ山縣ニ産ル
北野天神ノ氏子ナリ上今ハ軍法家ニシテ練兵ノ景ハ称号ナリ

戯花　作者ハ能登ノ七尾ニ住ス　岩城氏ノ優人ニシテ司鼓ト　岩長羽

だに拾もれんとて拾はむ　拾はんとれのかやうにきき
まてすれば　いさ山もとは花にあるに

笠　作者八冊羽黒ノ風人ニテ　尾城下ニ放遊セリ　冊以之

蓮の葉笠と言ひしらるとは　ちとせの名花流るるなれて
あるとてかぶるや賞ぶるとて　ものの名花西とちるさとし

鏡岩詠四季　林有琴

れしくとも　四季もかくれ　春の名所
春は　春の名所　春の名所

○詩ニ云ル所ノ詩ハ全ク歌体ニシテ四季ノ四詩ノ分明ナル詩ニ風雅四絶
ト云ハン但シ鏡ヲ鏡ハ鏡岩ト八畧語ニ似テ郷談ヨリ其ハ岩ハ義濃ニ
名高キ稲葉山ノ北面ニ隣リ廉ト発ノ物淋キ国ニ亜ノ双ノ名蹤ト云ヘシ
蛍ノ花和ナル廉ト発ノ物淋キ国ニ亜ノ双ノ名蹤ト云ヘシ
然ルに此詩ノ評ル処ハ二鏡ノ風流ヨリ四季モ長良ト詞ヲ繋キ
国ニ長良ノ名ヲ並ヘテ結句ニ諧語ヲ用ヰ名ハ半ヲ成俳詩
ト称スベシ作者ハ今ノ長良ニ住ス泊枕ノ人ノ長男カミノ林年優人

詠蓮　作者ハ越中ノ城ケ端ニ産　其風子
ちとせ仰のお願ふ　ちとせ　隠者ト称セリ
ちとせ　ちとせ　ちとせ　ちとせ

拙句の掛詞にあるなり　我心悲哀なるあり

梅嫌　作者自八高論ニ名録アリ　嫌ハ戾キ字和訓俗習トス　岸倚度

新世界らくなるあるも　苦しきなの名とあくしてく
梅のはなとあふのとうも　我りのうち地獄ありしと

悼ム北国公ヲ　蓮二房

越のたちの花とはれるね　立とあるは北の雪なるとの
月のえ郭のれとあるは　見やおもはせ行りあるも
武士の業手ら梅と吟して　文を頼政のもてはやるる

ちらはるるはなとなれて　我しれてよるとなれて

○評云此詩風姿アリ風情アリテ和漢ニ通用ノ錦トヤ云ン
去ハ前對ハ北行ト其地ハ竹林ニ河中ヲ廻シテ屋敷ヲハ
北国館ト云イ茶廬ヲハ北君菴ト云フ其館ノ名勝ス
トフ後對ハ文武ノ称ニシテ其名ノ風流ヲ添ナトヲ花ヲ咲ス
ト八本歌ニ敵シテ誠ニ黏轉ノ絶妙ト称スレ況ヤ七八ノ結語
ニハ貫達身ノ名ニ寄セテ同心道ニト慈ニ暴ル近ク朋友
ノ信ヲ尽シテ遠ク生死ノ道ヲ忘レスト云シ此公ハ金城ノ
駒一方子より終栗ノ記ノ亀巣ノ註ニ互見スレ

晩望　作者八岩国キシテ信ノ善光寺ニ住メリ獅子ヶ嶺通ノ郎士ナリトフ　岩未格

山ちかくあれはれて春はちかし　孤村の月のゆうしの淋

[illegible]

松讃　他松ハ賀ノ金城ニ在リテ作有ヘ豆田氏ナリトソ鍔文評ニ見ユ　豆風曲

代くに[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

蘭花　水陳人

[illegible]

[illegible]

業平屏賛　[illegible]前ノ員ヘル東帯ノ像ナリ　春花仙

[illegible]

俳諧意優人ニシテ吾仲左角ト書通ノ友ナリ　沢嵐七

[illegible]

[illegible]

寄餞意　　松丁牧

[illegible]

挑灯吟　作者ノ兩名ハ稽餞詠ニ　陳素六

世とぬらくく猿[illegible]
月のあらつきに[illegible]
[illegible]

四季詠　作者八長野氏ニシテ越ノ新潟ニ住ス長蹲郵ト称ス　長北柱

我為起とおもふ[illegible]
[illegible]

去者日疎ニ　寿文人

[illegible]
[illegible]
[illegible]

今を盛る鴨川北　東とちかく河とちかくぬ

年賀　然名八陳氏か樺屋ニシテ讃岐ノ一位菴ニ住ス常鑑ノ跡ナリ　而苔坊

しきり新春の長に逢ひ　我もむかしの振し嘆くむ

罪のなりに松とたかれて　をとふるく新年ちる

（作者八重平ノ兄名八文鑑）

雅海遊覧ニヨリ八幡八幡生家ノ　梅長者

能師ナル故ニトク

此世月のけしき伊勢の八幡とりてあるむし貴の

雅胸の接拭とたくるに煙とおとをもて

雅と毛穂と荷をもんと大炊川のり幸に沿の

有平北おれの風ほたるんくを俳諧の和歌寄り

雅山有て責殿しられ園のそうしるるんん

と伊荷を黄ものるる作筒とそうし伊荷八翁

をあらに入て指小本し法保れの名あり長良

の又浦ゝ人し有平て寄月の乱し

清て雅舟のかるとり鳥の山ちものに稲ものの

書風し法ゝ作ゝ有ゝ夫ゝ有ゝ

雅尾ゝ名ゝ名ゝ夫の乱　作ゝ作ゝ有ゝ

の俗服し衣ものを指て　鄭の一和とあるを海のり

遊女法花　伊東恕

ひら家の肌さむく
錦あるとまれとて
こゝ飯はこゝろとて
毛もまとまの公はは

恨別 竹詩八尾城作ニ又今人各ゝ出セリト搔餅記ニ其詳アリ

佐麦士

猫の尾はいかれぬら
枯てもとれる色ゝ
呵猫 首尾吟

岸倚度

今婦く加もとまも
あるを沖ゝ
蒐ゝ
もし者の角れ

よゆらひとも歸ゝ
れ
れ
れ

雨月愛蟹牛

豆風曲

今婦く加
あ
蒐
も

雨のはれ
ゝ
ゝ
ゝ

野馬賛

春の野馬は野にかすみ　秋の野馬は野に霧と
ともに野に風をなす　ともに野に雨をなす
ともに野に月をなす　ともに野に雪をなす
ともに野に花をなす　ともに野に草をなす
ともに野に木をなす　ともに野に人をなす
ともに野に鳥をなす　ともに野に獣をなす
ともに野に虫をなす　ともに野に魚をなす
ともに野に水をなす　ともに野に土をなす
ともに野に石をなす　ともに野に金をなす
ともに野に玉をなす　ともに野に光をなす
ともに野に音をなす　ともに野に色をなす
ともに野に香をなす　ともに野に味をなす
ともに野に触をなす　ともに野に法をなす
ともに野に眼をなす　ともに野に耳をなす
ともに野に鼻をなす　ともに野に舌をなす
ともに野に身をなす　ともに野に意をなす

高尤拒

壽圍肅憲

風のたちもとゝ長あるこそもかくもいとかなれ
みよ松のたゝ言ありと

表花仙

春山さくらちるやちるん
尾上一村のやとりかな
月もけうとく永しんせん
春雨いとゝ山ぬる

蓮二房

越の巴ゝ蘇の塔けとゝ
加の山中に梁寺あるかな　さゝ波の
波ゝ高ゝ高ゝ　それにとゝ
ものあつゝるみの西ゝ

得巴了

蘇ゝ寺ゝ人の来ゝ　酒ゝ
ゝ高ゝ人の来ゝ　ゝ
ゝ新ゝの酒ゝ　ゝ

蓮二房

蘇の酒

松ゝ
むゝ

○歌類　雑題

老人賛　　正親町公通

はくくしてこれいとかなあるはなぬ
今ものうきまてあるのいとかなく
むし宗紙の端ものこ宗
しとをのいしとをはしとをはしとを
ひとりあるくとも　宗鑑法師
ちるあるく連てをとをはしとを
いつれしらをめはしとあるかき

題不知　紙布八重屋翁ノ秋名ヲ得テ之越ニ名高キ道心　秋くれ坊

焼ふしてこの夜の月をしらしとも
あるかけしらてしらしとも

白髪吟　孟亭序　　芭蕉翁

陸奥文雅のおもてをしるしとゆるしたまへ
のはしとをあれやいとをはしとをはしとを
たをの体をしるしらしらはしとをはしとを
の髪をしらく肩をしてはしとをはしとを

[illegible]

一家[illegible]

[illegible]

○評ニ云此吟ハ遺稿ノ後詩ニ題類ノ評論アリ其論ノ略文
ニ曰故翁青ヲ官ヲ辭シ玉ニ故郷ヲ隔ルヲ七年奔ノ或年
他懷回アリ志ハ天和ノ始トヲ其後伊賀ノ西林寺ニテ
例ノ文稿ヲ改ルトテ行思ヲ向鬢ノ魂条ハ其月ノ感情ハ
演文レト發句ハ第ル深ヲ此故ニ參ヲ少ヲ以テ歩行
様ヲ形容セレニ當乎ノ詞モ慥ナラス增テ坊子ノ入所ヲ

[illegible]

次キテ他詩ノ歌モ然レキヤト云ルニ實モ前書ノ咏嘆ヨリ
墓冬ノ哀傷ヲ評セハ玉屑ニ云ル蛍惜ノ悲シ有テ吟ノ字
ヲ題センハト溪家ニ杜陵カ子ニ假リテ白髮吟ト題
セシヨリ誠ニ題類ノ太切ナル此等ノ註釈ニ知レトヲ但シ此論ハ
吉文後集ニ廿黄堅氏カ無学ノ所決ナリ然レハ今ノ歌類
ニ詞曲吟讃ノ類アルハ溪家ニ文選ニ隨ヒ本朝ニ文粹ニ效
ヒテ詩歌ハ本ニリ一根ナル故ニ此等ノ題ヲ交タルニ後人例ノ考ヘ

扇歌　孟序

東苑坊

[illegible]

きれい哥のんあらんもけ鈴のひらけ世とてひらて以新
の世はもろこしあらめ哥もろこしもの哥
はしや哥を人のわろくとはねてそ名と宿
きるあれさもけ哥のあれもいつれ
はしや哥を人の国うらく古今歌
こしらむけ哥のまりさくろれ
はしや哥を人のろれなのてはをそ
ちからさんけ哥めさいろれ
はしや哥を俳諧のようけてみる人は
ちさらむけ哥のわるあるいろれ

はしや哥を書はひろうてをよ
つるとけ哥のさいろれ
はしや哥をろのは袖あわ種はて
ちれくもうそよけ哥ろは
もとはおてはるあるむとろ。

○評ニ云此歌八全ク備六章ニシテ毎章ニ句充ナルヲ率ヤ
此ノ例ニト拍子ヲ換テ結文ハ和歌ノ語路ト成セル俗ニハ雅歌ノ
格トヤ云シ然ニ此歌ノ韻法ハ和歌ニ求韻ノ古制ニナラフ例ニ
我家ノ新格ヲ加ヘテ初ノ五章ハ起語モ結語モ五韻一協ノ
躰ナカラ後ノ三章十二韻ヲ換メルハ。又ノ舌音ニ初ヲ繫テ
結文ハ只ノスワノ韻ト成ル侵ニ秋風辭ノ如キ六韻一叶ノ

騒論モ世挙ケテ賢ト称スレ音韻ハ暫ク古法ヲ守ルノミ
總テ推量ノ沙汰ナレハ後人ハ例ノ郭象モヨ切一篇ノ註スル
所ハ其ハ一ハ扇ニ寄セテ逢字ノ縁語ヨリ班女カ恨タル古語ヲ
假リ其二ハ故郷ノ扇ヲ見テ法顕ノ歎キシ故事ヲ合スル其ハ之
ハ便面ノ詩歌ニ綴リテ人ノ記念ノ帛敢ナキヲ云ヘル其四ハ漢
氏ノ生別ヨリモ今ノ死別ノ恋シキヲ云フ其五ハ韋廣ノ詞ニ敵シテ
世ノ定ナキ有様ヲ云ヘル其六ハ貫之ノ歌ヲ摘テ世ノ永キ別
ヲ云ヘルニ招魂ノ二字ハ追慕ノ親切ニシテ一篇ノ骨節ト知
ヘキナリ但シ世扇ハ越ノ伶兎ニ傳ヘテ而栗庄ノ家珍ナリト所々
ニ傳字ノ違モ有ヘシ

辞世ノ詞　宇治通圓

一服一銭一駒中
最期一念雲脚に
りたてまつりてくらるれ
ゆきまれはれまれ
佛に奉る歌　苗事陀

たゆ冊をものもとてそ　後らかてそれの雲ゐ
ひくくと所ゆもとゆ　ほのかにもやてそ
春ゆくもゆのくをそ　おくの袂の花ゆ
雪のもとゆ　はなゆ

[illegible]

○評云此歌八擧府ノ古躰ヨリ十句ニシテ五韻ヲ用ユ去ハ漢對ノ法ナカラン論セハ大和ノ新制ト云ハン去ハ一篇ノ称スル所ハ其師尚白尼人ノ生前ニ彩ヲ愛セシヨリ今ハ西行ノ櫻ニ勝リテ廟前ニ此花ヲ奉リケルトヲ作者ノ姓氏ハ墨縁ニ出タリ

挽歌　並序　渡白柱

[illegible]

[illegible]

○評云此歌モ擧府躰ナカラ前ノ二句ハ七五ニ韻ヲ踏ミ後ノ一句ハ七ニ韻ヲ踏ムモ和歌ノ韻法ニシテ總テハ八句四韻ナリ本ヨリ擧府ノ常法ニ發語ヲ句外ト成セリ和歌ノ末韻モ五文字ハ言捨ナリ然ハ此等ノ歌ヲ以テ和漢通用ヲ称スル

比丘尼曲　此曲ハ例ノ新制ニシテ此等　山岸昨蹇

むらしへ廉北ゝの此花も　ゝらとおかの孫食ゝに

あるかのごとくなりぬる　庭もせの酸かりしも
清涼のかりそめなりしも　服部のゑぬしひろしき
ゆかりのそこなはれぬ　久しの命のつれなくなりぬ
いとゝの雲もそなれてや　あるかたのゑぬしの
世と秋風の同じくなりぬる　ものゝ花もさきぬる
ゆかりの月雲もそなれぬる　月ゝ花ゝ遊びなれぬる
ゆゝしの神とのゆゝしきあれども　腰の紙枚ゝ合と言ふ

七夕歌和讃　之貞　石河師

月の神ゝしもあるべしゝ世とかりたる

のゝ花ゝのあるまゝとかりぬる
ちゝゝの姫ゝゝ
月ゝゝゝゝ
ゝ舟ゝゝゝ
ゝゝゝの船ゝ
月ゝもあるゝの秋ゝ
神ゝむくゝゝ
あゝゝ船ゝゝ

○評云礼讃ハ序山ノ遠法師ニ始リテ太秦ノ善観房ノ節ヲ附玉ヒ我朝ノ声明ト成セリ其意ハ仏ヲ讃歎ノ和歌二唱唄ノ類ナリトヲ然レハ此讃ノ趣ハ人間ノ色未曾ヲ

星三寄セテ人ニ無常ヲ示ス凡ハ應現婦女ノ仏説ヲ菩薩
ニ天部ノ称号ト知レシ誠ニ俳諧ノ琴ニ云ハル談笑訊諫モ他ニ又
ミテ遊宴中ノ良手ヲ知レトナリ而阿ノ名ハ剃髪女ニ山ノ名ナリ

讀法華経ヲ　秋之坊

その時とくちはてしかの女ちの
ほけきやうあるこそ捨ぬ花なれ

故人庵茶歌　蓮二房

唐の世に中百篇の詩ある
まれ先生かつ〻幸て向門の鄙竹疑是故人

来ルカ
かたつれもいたれとけ所なのあるとて茶有のとき
ゝ海あるき所も産の所北斗ゝとゝいてたの
鄙めこゝとて茶ものきとゝいはもゝ旅と
手ゝ人ほ世のの北宮のゝ塵と世ゝて北竹と
北のゝとまゝ名ゝ稲荷の鄙郎ゝ平ゝて玉川ゝ
おの幸の焼好茶と入れゝゝゝゝ俳諧のゝ道と
ゝ有ゝき茶ゝ石のゝ茶ゝ有れゝはゝゝゝゝ
ハ遊のゝんゝれも商きゝのかゝゝれハ茶人のゝ
茶枝ゝよゝゝゝゝゝて幸人の枕詞あゝ

△うくつの泡と書くとも●白花のひらよ
書とたれい二碗と碗として七碗とかの
●清風とともに清風ろこと書ちわんまへ合よ
うくきくしらやしの。元とたれ文書ちりて玉ち枕
の風もこと枕かるあ秋と書ちの花麻の書あ
吹かくる萩の風もかの高のの行く吹ちくしく行し
よ代のをりあれそや●蓬落のうつの世をれけ
をよしくをちをちをちをちをちをちと

○註曰●飲中八仙詩李白一斗詩百篇ト云ヘリ○行書ノ字ト云ヘリ
いかなるあらは書くとかるまつとかいかなりと

●蘭省序山ノ對八前ニ出タリ●李白襄陽歌鵝鴨杯
鸚鵡盃一日須傾三百盃●盧仝茶歌搗鮮姿芳芽
旋封裹送玉川ト八序仝ハ標字ヨリ△十論芭蕉公羽ノ
遺訓ニあら茶ニ石碗ちてれ茶ハ俳諧のこと茶と知
ア云△ちれ〳〵ハ小杯帝のゆ茶ちとちの
ちてはかよ本のけ物りちけられいちりの△茶人ニ茶
枚手ト八茶人歌人ト詞對テ定規ノ古風ヲ矣ルナリ俳等
ラ俳諧ノ意地ト知シレ△うくかくい枕詞ナリ歌ニハ泡ノ訓ヲ
假テ多ハ哀レト誦メリ万葉ニ歌方ト書タレト轉ノナト書ヘ
キニヤ擬スル世ニ句ハ前ニ奥茶ノ泡ヲ立テト云ハ例俗言モ通
難キヲ△うくかくの枕ニ雅語ト成セル世等ヲ擬骨ノ絶妙ト
称スヘシ●茶歌ニ白花浮乞疑碗面ト八其泡ノ白キヲ形

宮ニハ玉川ヲ茶陽ハ婦ト見ニ文り二碗ハ下七碗三ノ八其ハ歌ノ
取意ナリ●同歌ニ唯覚ル西脹習々清風生ス云ヒ○貫之歌ニ
桜ちるまのりはなをかりとれるなをてやりる
歌ノ通フトハ式子内親王ノ歌ノ載入ナリ○新古今ニハ
より山て入合廉のあと吹なる萩の下風○孫子載ル代
ハ一さくさのまくさ抜つれいけとや君とあなるらん
●本歌ハ結文ニ蓬莱山在ニ何處ニ玉川子乗ニ此清風一歌ヲ
帰去ト云ヒ結語ハ此ノ一字ヨリ一篇ノ断續ヲ見ルベキナリ
○孫云此章ハ始より終まて序分ノ茶歌ト敷ニ云ふ
ハ起承断続の句格ヲ此ノ如ク長短ノ所ノ所ノ
七新製の一格とあり一ハ古人の語ハ
ハ此ノ茶ノ作者ハ西行の所法あれハ例の後跡

一ハ茶ハ今茶篇の称ヲ茶ハ一節の
ニ蛇とおろし作ル蓬ハ代の祝言とも
て句格をあまく和ノ歌の格ヲ和漢の
ハ長短ハ所ハ長短ハ所ハ
漢家の杯ハ越の福ハ嬉宜ハ長駆ハ飛燕
のあまくるるハ腋の間ハ青ハ風あて
て六根ハ六方の方ノ方

練廉歌　野盤子

野ニ棲ム山ニ宿野盤子愁病何ナンソ身ニ接渡頻ナル
枇杷李雞親唯一日雁過易ル過ニ三ノ春

可憐蓬茅長為客自愧傳書遠附人
我聞夜深抉木皐隨月暮亡家
子罵嗟夫灯火幾年傍母香烟
墓月亡親君見眼凄烟霞誰可
憐心誇風月手全貪起来好有伎輿
胥猶可風雲放此身

○詩云此歌ハ灯花詩義最ニ在リテ天和比作ナリト誠ニ一篇ノ
躰ヲ見ルハ趣漫家ノ詩脉ナカラ意ハ太和ノ風ヲ云シ然ハ
此類ノ格ヲモ傳ヲ和漫ニ通用ノ鑑ト成サハ此文集ノ撰ナラント
例ニ詩義最中ヲ透来テ此一篇ヲ出セルより学ハ趣意ノ
差別ヲ考ヘテ黄白ノ絃ヲ恐キより練濤ハ但シ多情ノ様ニシテ
旅亭ノ病懐ヲ写セル野盤ハ先師ノ名ナカラ竹篇ノ捷ノ
意ヨリ起句ニ我名ヲ喚出セリトソ右ハ本集ノ題詩より撰スル
此歌ハ呉融カ益山中歌ノ如ク七六ノ句法ヲ用テ三耶ノ發語
ハ例ノ楽府ニ效リ然ルニ古文ノ歌曲ヲ見ルハ五七ノ語路ハ和漫
ノ恒例ニテ或ハ九七ノ長短アリ或ハ五七ノ長短アリト假名ニハ語
路ノ拍子ニ合ハス爰ヲ音訓ノ差別ニシテ和漫ノ学問ノ遠用
ナルハ先師ノ詩序ニ云ルル如ク趣ハ漫語ノ学面ヲ飾ルモ意ハ
和詩ノ風格ヲ失ヒラス然ルモ語路ト音韻ノ汁ハ辭言ハ芳捐
江神ノ智アルモ我朝ノ土地ニ素達スル学者ハ漫家ノ殷煩ノ無
業ニモ方リテ語路ノ長短ト音韻ノ叶不叶ハ皆々推量ノ者
ナルハ返スノモ我門ノ学者ハ假名ト真名トノ通用ヲ知キより

○辭類

聖人ハ美辭

沢庵和尚

旦向ヒ出テ来テ天見ハ神ハ
美モ衣ヲ美物ヲ遠析ヲ本縁
耳ヲ花ハ波ハ
色能ク美
感ヒ好ム人ニ

○評ニ云ク世一章ハ聖人ニ無夢ト云ヘル古語ノ四字ヲ題シテ
世筆躰ニ書置ヒルヲ意ニ辭ノ一字ヲ添テ文撰ノ飾ト
成セリ去ハ世文ノ抑子ヲ評セハ或ハ万葉ノ旋頭歌ニモ作
ス或ハ庭訓ノ真名文ニモ作ス世筆ヲ大和ノ辭トス付テ例ニ
文撰ノ新製トヤ云ハン誠ニ世和尚ハ世ニ勝レテ其文ニ于真實
ナル意ニ好事ノ風流ヲ見ハ其世ニ俳諧ヲ勤ル本意ナレ

墨ノ辭　并序

苗字陀

海ハ鉢の城ありとも風を防ぐのうり。富士の
きりのりをとれあり辛ちらし柳ちらしなりや
背中ハ茶臼とかつて二ちと結ちらし君ちやい
ものを雪舟雪村のもとも世祇ありの歌

[illegible]ものあるおひたちに仕うまつりてとき行くに[illegible]
垢とひれりて化けの意とうつし△塵ちりの[illegible]
ゆてうつもあるふれ[illegible]れ山焼したれ[illegible]
[illegible]れあるとなりしに月てう寛北茶[illegible]
おなりの脚布のもとうとちうめも海て猫所の置(ワナ)
[illegible]れ人の[illegible]
[illegible]猫を飯食の天あれて猫のよ北おりく
ひれりとされたの寛北を面くしかあてれく
不壺の居を失ふすし有る猫喜北あれれ
風い熱湯とゆうて仙さんむうとひとちの花の

[illegible]ひて宮女北うつ[illegible]
の地[illegible]。[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

其辞

秋の和さむを何うとか　其のれ北[illegible]
行れ[illegible]　人結を余[illegible]
故[illegible]　[illegible]

[illegible]

○註曰▲摺伽経乾闥婆城註屋樓之類也云小月令註屋樓
大蜃也○西行[illegible]
り[illegible]△俳語拾遺童蒙[illegible]
とせ[illegible]富士の[illegible]
農民の[illegible]天下を[illegible]
の雲此塵[illegible]山焼[illegible]
篇し其[illegible]訓の款入り△書経[illegible]食[illegible]天云●山谷演雅詩
風[illegible]湯沸[illegible]獨血食▲常陸尼八拉双帛[illegible]在り○案女
[illegible]山の歌八古今集[illegible]在り[illegible]対八乙食ト義女ト
衣類[illegible]寄セテ刃虫[illegible]哀れ[illegible]業[illegible]石り△中町訓[illegible]
の婦女[illegible]

[illegible]

○[illegible]云ひ辞を拾ひ此[illegible]
[illegible]或夜の[illegible]
[illegible]
今宵[illegible]
[illegible]
作者を湖南の大津[illegible]
俳諧の[illegible]

感歯落辞

東苍坊

我今年痛歯而見樂天之歯落辞[illegible]則髪

裏辭頭菓裏辭樹與歌誠運和漢之情而
爰無感慨乎耶今將不住吉之和歌共將競
文章之哀與也熟思人之遊世則同好花
鳥之色乎耳樂絲竹之声乎揀其香乎調
其味乎皿四有實謂意之事乎矣乍花有
皿四有善用了則爲樂人乎悪用了則爲
苦人乎物皆謂一得一失有矣于然謂人
間之歯物者貴賤貧武夫商人麼有
日々夜々之用而奥齡乎口齡乎令樂人
了共無令苦人事爾迚爰過世人者眠花

了醉月乎盛時不有不樂其歯裏日余者
苦皿歯不知生則何知死與者孔子麼所
宜給歯之事也乎柰何所哉人之思違而
耳同者爲不病日之用心共歯者不思不
裏時之養生爰爾人之嚼老而老曽森之
夕崗爲驚一菓之秋則葛之毋菓勤初冨
矣萩之上菓麼風洩而物言則笑了童部
乎物喰則慙通給司乎何欲老身之爾者
有見苦乎耳副同副不似于歯乎矣好夫
所謂人者髮容了共伊勢海蛋之不菓之菓

麼有令意墨染之尼攝共爲蚩之技乎者
不莫爽而曉之添霞麼有物凄乎扨社人
之爲意迚飾耳了耶瑳嶋止耶蚩者誘引
謂伊達之花矣止尤者在共觀物之栄落
了則名麼被瑳摺針之砂而某耶有鏡之
山則沫梅花之油居嘸揚枝之薫而昨日
者貴於夜光之璧今日者賤如夕貝之
核今何之栄落如斯也耶朝顔者花之假
世共不似生而見憂同人乎苦手焦了雖
子之香而不異畏之嚼煎餅今也則入

豆腐之味而爲似蝶之掌牡丹今斯迚離
老之声色也則蚩已悔爲明暮之樂辱哉
我若無同則隨無而令蒼絃之中遊心矣
我若無耳則隨無而可書盃之間置身矣
實夫在世而無蚩則且今有而味之膳共
夕今有八珍之某共懃令悅老之同而所
宜給心造罪非施餓鬼之誠乎耶我今悔
一蚩之過而誨而世之人了則可畏飲食今
不忘酒色今身者所栄若松之緑共心者
黄又老木之栄迚厭入身秋之風而逞鷹

之恪一羽麼徒蘭之培二葉麼蒲疾詩一
蚩之價而不換千兩之黃金了哉右迚換
月花之風色而貪魚鳥之風味則從詩歌
連歌可賤見了共聖帝之詞令麼人者以
食爲天與乎兼好法師麼從玉庵有此餞
思意味敷則哉書置流石之竹帛皇於
然人之忘蚩也則可厭者謂忘來而歇耶
誠爲忘天人也乎

○評云此題八白氏文集ニ出テ樂天カ老裏歎ヒシ灯花詩最
ニ感ノ一字ヲ加ヘテ大和真名ノ辭ト成セリ去リヤ佛家ノ

經說ニ眼耳鼻舌身意ヲ六根ト云ヒ色声香味觸法ヲ
六欲ト云テ圓通ヲ說テハ其利益ヲ勸メ執着ヲ誡メテハ其
損害ヲ懲ラス六根ハ但シ善惡ノ二相ト云ヒ然ルニ此蚩ノ用
タルヤ四支九竅ノ働ニ勝リテ日夜ニ人ヲ利スル所モ物ヲ害
スル莫ナシ況ヤ老後手ノ色ヲ離レ六欲ノ中ニ何ソヲ樂シ去ラ
儒者モ仏經モ此蚩ノ徒ヲ称セ子ハ強テ耳目ニ雖ヲ附テ蚩
ニ千金ノ價ヲ爭ハ孔爻ヲ文章ノ意地ト知リ佛諸ノ業格
ト知キナリ誠ニ一篇ノ風流ヲ称セハ老曾ノ設ニ和ヲ婉曲ヲ
宗シ摺針ノ段ニハ佛諸ノ談笑ヲ尽シテ中比ハ一篇ノ大綱ナレハ
管絃ト書ト面ト二耳目ヲ讓法テ蚩ニ老後ノ日用ヲ奉ル
前ニハ孔子ノ死生論ヲ合ハセ後ニハ釈尊ノ誕生道ヲ引キテ
儒仏ノ證文ニ文章ヲ固見タル增テ雁鳥羽ト蘭葉ハ和

歯字ノ鄉音十六本ヨリ六書ノ例ニ效ヒテ和漢ニ假借ノ絶妙ト称スベシ然ルニ篇ノ結段ハ例ニ連俳ノ敵詞ヨリ名ニ遷フ書經ノ帝範ヲ引テ天ノ字ニ万人ヲ誡メル誠ニ理論ノ麗奚ト云イ誠ニ文法ノ死活ト云イ和漢ニ假名真名ノ自在ヲ得テ世等ヲ文操ノ本懷トヤ云ハン学人ハ文字ノ置斯ヨリ句讀ノ長短ニ眼ヲ留ムキナリ

文操卷之二終